

8. 滋賀県 東近江市立八日市図書館

課題解決につながる「市民力」「行政力」向上を図る図書館サービス充実事業

(平成19年度地域の図書館サービス充実支援事業)

(1) 事業の趣旨・概要

地域に生きる市民が自ら主体的に地域課題を発見し、行政とのパートナーシップにより、その解決を図ることが現代の分権社会には求められているが、そのためには、地域で何が問題なのかを的確に判断するための情報と、その解決手法を得るために情報を収集分析し、政策形成へと発展させる能力が求められる。

この地域課題の解決能力を「市民力」「行政力」と位置付け、その向上のために既存の図書館機能に加え、さらに高度な情報探索力、活用能力の育成を図るための事業と、実際の課題を素材にそのような能力をトレーニングするプログラムの両面から、図書館サービスの可能性を実践、検証する。

※委託先・図書館の概要(平成20年3月末現在)

委託先	自治体・機関名	東近江市立図書館 (八日市図書館)
	所在地	〒527-0028 滋賀県東近江市八日市金屋2丁目6番25号
	連絡先	TEL 0748-24-1515
		FAX 0748-24-1323
URL http://www.library.higashiomi.shiga.jp/		
図書館の概要(平成20年3月末現在)	職員数	(正規)25人(うち司書25人) ※市立7館の合計人数 臨時職員も司書有資格者
	開館時間	八日市:火~日 10:00~18:00 その他:水~日 10:00~18:00 ※湖東:木のみ 10:00~20:00
	年間開館日数	285~234日(館によって異なる)
	蔵書数	851,000冊 ※蒲生を除く市立6館の合計
	利用登録者数	39,600人 ※蒲生を除く市立6館の合計
	年間利用者数	(貸出利用者)230,000人 ※蒲生を除く市立6館の合計
	年間貸出冊数	1,094,000冊 ※蒲生を除く市立6館の合計
	運営状況	市立図書館は八日市、永源寺、五個荘、愛東、湖東、能登川、蒲生(平成20年11月開館)の7館で、八日市図書館が中央館の役割を果たしている。蒲生を除く6館に司書資格を有する正規職員が配置され、主に選書、事業の企画立案、レファレンスを担当している。臨時職員は様々な雇用形態があるが、みな司書の資格を有し、主に貸出・返却のカウンター業務、軽レファレンスを担当している。

※地域の現況・特色

<p>東近江市は、滋賀県の南東部に位置し、東西に細長く、東に鈴鹿山系、西に琵琶湖がある。2005年2月に八日市市、神崎郡永源寺町・五個荘町、愛知郡愛東町・湖東町の1市4町が新設合併して東近江市が誕生し、2006年1月には神崎郡能登川町・蒲生郡蒲生町を編入合併して、県内4番目の大きな市となった。</p> <p>面積:388.58km² (滋賀県総面積の約9.7%) 人口:11万8千人</p>

(2) 事業の実施体制

利用者である一般市民や行政職員、図書館職員が、「東近江市立図書館計画」における具体的な図書館活動を協働で支えていくための任意団体である「東近江の図書館を考える会」が、本事業の実行委員会を受託した。

①東近江の図書館を考える会

<委員構成>

一般市民5名（元八日市図書館長、図書館協議会委員等）、市教育委員会学校教育課職員、市企画課職員、八日市図書館館長、五個荘図書館館長、愛東図書館副主幹、能登川図書館職員、湖東図書館職員、永源寺図書館職員、八日市図書館職員2名（事務局） 計15名

<主な役割>

事業全般に関する検討。コアになる事業の企画を固めた後は、事業ごとの運営会議で詳細を検討した。

※「東近江の図書館を考える会」の市民委員は、八日市図書館10周年記念行事の実行委員会を母体に結成された「人と自然を考える会」のメンバーである。

「人と自然を考える会」について

自然や環境問題に関心のある個人会員の集まりで、1995年の結成以来、月1回の例会での学習や通信の発行などの活動を継続している。平成18年度には文部科学省委託事業「社会教育活性化21世紀プラン」で「“限界集落”の解消を目指す産業と生活文化支援モデル事業」を八日市図書館と共催で実施した。現在は、八日市図書館2階の市民の憩いの場である「風倒木」のコーヒーコーナーと図書館の除籍本のリサイクル販売の運営を受託している。その収益は「本の森助成基金」として積み立てられ、図書館での環境関連資料の購入や催しなどをするために使用されている。現在の会員は約80名である。



リサイクル本販売コーナー



オーガニックコーヒーを飲みながら読書を楽しむ
「風倒木」のコーヒーコーナー

②事業ごとの運営会議

主要事業に関しては、実行委員を中心に事業ごとのチームリーダーを決め、運営会議を実施した。運営会議では、「東近江の図書館を考える会」以外のメンバーにも声をかけ、各チーム市民、行政職員、図書館職員合わせて6～7名が参加し、市の中心部に立地する八日市図書館を会場に夜間開催した。各事業の運営は、運営会議のメンバーが中心となって行った。

(3) 事業体系

実施した事業は下記の2つである。

①地域課題発見のための情報検索能力向上支援	<p>i 課題解決のコツ</p> <p>ア. 見えていないモノがある ～まちの「良かった・困った」発見講座～</p> <p>イ. 私が会話のカギを握る 「ファシリテイトって何だ?」「やってみようワークショップ」</p> <p>ウ. もっとおいしい図書館の味わい方 ～図書館をパートナーにして“情報通”“政策通”になろう～</p>
②課題解決能力向上のための実践的プログラム	<p>i 市民参加による課題解決事業</p> <p>ア. 映画「ナミィと唄えば」自主上映会+本橋成一監督の講演+写真展</p> <p>イ. ゆずからはじまった馬路村の村づくり地域づくり</p> <p>ウ. シニア世代・ふたりの時間をゆたかにするために ～家族を考える、夫婦って何?～</p> <p>ii 図書館の使命、機能を高める事業</p> <p>ア. 元気なあしたをみつけよう ～図書館でまなぶ・あそぶ・つながる～</p> <p>イ. IT技術講習 ～図書館ホームページを刷新しよう～</p>

(4) 当事業に取り組んだ背景・経緯

合併によって新しくなった市の一体感をつくりだすために、図書館は何ができるのかを模索していた。合併後、各地域にまちづくり協議会ができ、地域リーダーと行政が協力して地域の課題を見出し、意見を吸い上げ、政策形成する必要が出てきたが、その際、出された様々な意見を互いに理解しあい、どのような合意点を見出すかという合意形成のための手法の開発が求められた。また、実際にどうすれば地域が元気になるかという課題解決のための具体的なメニューを提示する必要性もあった。そこで、図書館としては、従来からの本の貸出し、調べものの手助け以外にも役割を広げ、地域のアイデンティティ醸成に寄与し、まちづくりや自治体経営の中での図書館の機能の有効性を証明する取り組みを開発・実践したいと考えた。

<ワークショップの手法に着目したきっかけ>

合併前、旧自治体ごとに「どんなまちにしたいか」という職員対象のワークショップがNPOの運営であったことと、合併後、まちづくり協議会を立ち上げる際、専門家によるファシリテイトを実際に見たことにより、職員もその手法を身につける必要があると感じていた。また、当委託事業の事務局担当職員が社会人大学院でワークショップの理論を学び、実習を経験していたという実績もあった。

(5) 各事業の内容と現在までの取り組み状況

①地域課題発見のための情報検索能力向上支援

広範かつ多様な図書館資料から、潜在的な地域課題への気づきを得たり、その課題解決に図書館資料や司書の情報検索力を活用するための能力向上につながるノウハウを、実践的な講座で支援する事業を展開した。

i 課題解決のコツ

ア. 見えていないモノがある ～まちの「良かった・困った」発見講座～

対象：市民、行政・図書館職員（参加者27名中、市民と職員が半々くらいの参加）

講師：同志社大学政策学部教授（政策ネットワーク論、政策過程論）

内容：身近な問題発見のコツを政策プロセス手法を用いて探った。

ワークショップの様子



ワークショップのまとめ



イ. 私が会話のカギを握る

対象：市民、行政・図書館職員（参加者 50 名中、職員より市民の参加が多かった。市民のうち5名はまちづくり協議会のメンバーであり、また仕事に活かせるということで民間企業勤務者も多かった）

講師：同志社大学大学院総合政策科学研究科教授（ソーシャルイノベーションコース）

テーマ：1回目「ファシリテイトって何だ？」 2回目「やってみようワークショップ」

内容：上手な会議、会合の進め方のコツを実際にワークショップを進めながら学んだ。



基本的なレクチャー



ワークショップの様子

ウ. もっとおいしい図書館の味わい方 ～図書館をパートナーにして“情報通”“政策通”になろう～

対象：午後開催—図書館職員（参加者 40 名） 夜間開催—市民（参加者 50 名）

講師：元鳥取県立図書館長

内容：ビジネスや政策形成に役立つ図書館の使い方を事例を交えて紹介された。

【工夫のポイント】

対象を図書館職員と市民に分けて開催したことにより、それぞれの対象向けに内容を深められた。

②課題解決能力向上のための実践的プログラム

市民、行政が自ら主体的に課題に取り組む際のアプローチ方法や技法について、講義とワークショップによって体験的に会得することを目指した。

i 市民参加による課題解決事業

図書館を多く利用している団塊世代の市民の課題に注目し、その解決につながる事業を展開した。

ア. 映画「ナミィと唄えば」自主上映会+本橋成一監督の講演（ワークショップ）+写真展

講師：映画監督

対象：団塊の世代を中心とした市民（若年～シニア世代の市民 120 名参加）

内容：過酷な運命を背負いながらたくましく生きる 85 歳の元気なおばあさんナミィの生き方は通して、生きることの意味、幸福のあり方について参加者と監督がワークショップを通して探った。

イ. ゆずからはじまった馬路村の村づくり地域づくり

講師：馬路村農業協同組合長

対象：市東部地域の住民（農林業に関わっている中高年市民を中心に 97 名が参加）

内容：過疎化が進み「限界集落」の危機に立たされている東近江市東部地域と同様の環境にあるが、地域のゆずを活かした産業振興で、活気あふれる村づくりを進めている高知県馬路村のキーパーソンの話を聞き、議論を重ねることで、東近江市の山間部の地域活性化につながる方策を探った。

【工夫のポイント】

該当地域の住民が参加しやすいように、東部地域の永源寺図書館を会場に実施した。この事業には市企画課職員が企画に関わり、「限界集落」という市の行政課題の解決につながるような事業を展開した。

ウ. シニア世代・ふたりの時間をゆたかにするために ～家族を考える、夫婦って何？～

講師：心療内科医

対象：シニア世代の市民（参加者 45 名）

内容：会社人間であった夫が定年退職によって在宅し続けることで、ストレスを感じ精神疾患に陥る女性が増加している現実を踏まえ、夫婦の関係性に焦点を当てつつ、第2の人生をどうすれば夫婦でよりよく生きられるかを心療内科医の講演と参加者のワークショップで考えた。

第1部—講演会「主人在宅ストレス症候群 ～家族を負担に感じないために～」

第2部—フリートーク「話さなければ始まらない、考え合います夫婦のあれこれ」

※長寿福祉課と連携しての企画だったが、この問題の当事者が多く参加し、予想以上に反響があった。ファシリテーターとして関わった男女共同参画課の職員にとっては、新しい政策課題発見の場となった。



講演会



フリートーク

【工夫のポイント】

○団塊世代の問題については退職男性の生きがい支援が多いが、主人在宅ストレス症候群に関するテレビ番組を見た運営委員の提案により、潜在的な問題である退職男性の妻にスポットを当てた。

○第2部では参加者を 10 人くらいずつの4グループに分け、フリートークを行ったが、2グループのファシリテイトは、先記① i 「課題解決のコツ」の講座に参加した運営会議メンバーが担当し、学んだことを実践する場を設けた。

ii 図書館の使命、機能をも高める事業

図書・雑誌という既存の資料に加え、インターネット上の様々な情報や地域資料、人的ネットワークにより収集される口コミ情報など、あらゆる情報が集積される図書館の“点”としての情報を効果的に提供し、“情報と人”“人と人”をコーディネートする役割である図書館司書の専門性を高める事業を展開した。また、自治の主体である市民があるべき図書館像を考え、発言できる市民参加の図書館政策形成を図る事業を展開した。

ア. 元気なあしたをみつけよう ～図書館でまなぶ・あそぶ・つながる～

対象：幼児～高齢者 幅広い年代層の市民（参加者 180名）

会場：蒲生公民館 ※この事業実施の翌年度に蒲生図書館が開館予定のためこの地区で実施

内容：基調講演の後、2分科会に分かれて参加者で討議を行った。また、同時に写真展や本・雑誌のリサイクルコーナー、おはなし会、折り紙教室なども同時開催し、幅広い年齢層の市民が楽しめる“図書館まつり”としての企画も実施した。

○基調講演：「図書館は、なぜ必要か？」 講師：東京学芸大学教授（図書館学）

○分科会：「地域に育つくらしの中の図書館 ～蒲生の図書館をどんな図書館にしたいですか？」

⇒20年秋に開館予定の蒲生図書館のあり方について語り合った。

「図書館活用くるま座談会 ～図書館を“これから活用する人”と“使っていない人”～」

⇒利用している人、していない人を交えて図書館について話し合った。

分科会：「図書館活用くるま座談会」の様子

【工夫のポイント】

分科会については、先記「課題解決のコツ」の講座でワークショップを体験し、ファシリテイト力を身につけた行政職員の実践の場となることを意図して企画した。



○写真展：「としょかんのこどもたち～ほんが好き・としょかん大好き～」

図書館雑誌掲載のフォトギャラリーを担当している写真家が図書館の日常の風景を撮った写真を展示した。

○その他：移動図書館車大集合、本・雑誌のリサイクルコーナー、おはなし会、おりがみ教室、コーヒー・お菓子・袋物などの販売、カプラ（積み木）であそぼう！、市内図書館の紹介コーナー、利用者登録コーナー（図書館利用カードをその場で発行）



写真展



移動図書館車

イ. IT技術講習 ～図書館ホームページを刷新しよう～

対象：図書館職員（各館から参加）

内容：単にホームページ作成技術を学ぶだけではなく、稼働中の図書館ホームページを実習素材にして、より機能的で洗練されたサイトにバージョンアップすることを目標に実施した。視覚障害者のアクセシビリティ（アクセスのしやすさ）を高めること、地域情報を多く掲載することに配慮した。

（6）事業の成果・効果と事業実施後の取り組み

①事業の成果・効果

事業の主な成果・効果は次のとおりである。

i 職員の意識の変化

事業を通して、地域や図書館をよくしようとする市民の姿を図書館職員が間近に見て刺激を受け、仕事に対する意識がかなり変わった。

ii 市民の図書館職員を見る目の変化

図書館が地域の「情報発信基地」であるということが市民から認知された。

⇒平成20年12月に発足した「地域から医療福祉を考える東近江懇話会」（市民の任意組織）から、健康医療情報の面で必要とされて、図書館がメンバーなることを依頼された。

iii 様々な人とのネットワークの構築

事業を通して、行政職員やあらゆる層の市民が図書館の様々な機能・役割を知ったことで、図書館への期待が膨らみ、図書館の理解者、協力者が増えた。

iv レファレンスの変化

○調査相談件数の増加→前年度比22%増（平成19年度データ）

○内容の変化→今まであまりなかったテーマ（地域・郷土に関するもの、他地域のまちづくりに関するものなど）が出てきた。

○行政職員からの問い合わせが増加

○製造業関係者の利用が増加→工業系の写真入り専門書の貸し出しが増加

【取り組みのヒント】

○小さなリーダーシップをネットワークすることがまちづくりにつながる

米英の図書館では、司書が地域のコーディネーターとしての役割をもって活動している。行政職員と市民をつなげるなど、人と人をつなげることも図書館職員の仕事だととらえる必要がある。

○最新の情報と語り継がなければいけない情報の両方を大切に、提供する必要がある

各館とも「関連図書コーナー」などの特別コーナーで、時機に合った情報提供をしている。

ワーキングプアや派遣切りなどが社会問題となった時期の八日市図書館の「働く」をテーマにした関連図書コーナー

<関連図書コーナーの運営>

本委託事業のように全図書館で取り組む事業の際は、各館の人の目につきやすい場所に特別コーナーを設置し、関連図書、事業のチラシ、新聞記事などを配置している。また、共通の関連図書リスト（閲覧用）を作成するなど、全館共通でPRを行っている。

日常的には、時事問題などに対応した展示、郷土に関する展示、平和など恒久的な問題をとらえたテーマ展示を企画・実施し、市民や地域の課題解決につながる図書館サービスを意識している。



【成功のキーポイント】

- 長年、図書館をフィールドに活動し、図書館との協働事業の実績もある「人と自然を考える会」の存在が、本事業での市民・行政職員・図書館職員の連携・協働のベースとなり、幅広い層の市民の参加や多分野の関係者との連携を可能にし、多彩な事業を企画・実施できた。
- 運営会議メンバーが（１）の「地域課題発見のための情報検索能力向上支援事業」に参加し、身につけたファシリテイト力を事業企画の場面や後半の事業実施の場面で実践的に活用できた。
- 市民にとって一番身近な地域情報紙である「滋賀報知新聞」（５大新聞への折込み紙）が各事業の開催の告知や開催の様子を大きく掲載してくれたことで、市民への大きなPRになった。

②事業実施後の取り組み

委託事業実施後、次のことに取り組んだ。

i 図書館職員がワークショップの手法を仕事で活用

八日市図書館で実施している利用者懇談会では、従来行っていたフリートーク形式だとなかなか意見が出なかったが、ワークショップの手法を取り入れて実施したところ、意見が活発に出るようになった。また、全館の職員が出席する全体職員会議の場でもワークショップの手法（主にKJ法）を活用している。
⇒対市民や職員間の様々な場面で、ワークショップで学んだファシリテイト力が役に立っている。

ii サービス企画検討チームの立ち上げ

平成 20 年度から全館横断的に部門別の 7 つのチーム（1 チーム 3 名程度）を編成し、職員が自分で考えて行動するしくみをつくった。

（７）課題と今後の展望

①課題

課題としては主に次のようなことが挙げられる。

i 職員一人ひとりが自立し、政策立案能力をつける

資料提供をきっかけとして、図書館職員が行政職員にサゼッションすることができるようになり、また、そのことを通して、地域や行政組織の中に図書館機能がビルトインされることが望まれる。

ii WEBサービスの充実

WEB上の一次資料に触れてもらうことで、実際に図書館に来館したいと市民が思うような充実したサービスにしていくことが必要である。

②今後の展望

今後の展望は次のとおりである。

i 各図書館に市民の自発的組織である「図書館友の会」をつくる

ファシリテイト能力がある職員が運営を支援することにより、市民の自発的活動が組織されることが望まれる。また、ファシリテイトの手法が市民に伝わり、活用されることを期待したい。

ii 「健康医療情報コーナー」の開設

平成 21 年度から能登川図書館に「健康医療情報コーナー」を開設予定で、準備を進めている。

iii 全域サービスの実施

平成 21 年度から移動図書館車の資源と人材を集中させ、効率化を図り、全域サービスを目標に図書館サービスの空白地域（図書館から 3km 以上の集落、1km 以上の小学校・幼稚園）をまわる予定である。